2023年９月20日

資料館通信 第84号

ふじみ野市立 上福岡歴史民俗資料館 埼玉県ふじみ野市長宮１－２－11 TEL 049－261－6065
大井郷土資料館 埼玉県ふじみ野市大井中央２-19-５ TEL 049－263－3111

会期；6/10（土）～7/9（日）
会場；上福岡歴史民俗資料館
１階ホール、２階ホール

藍は昔から染色に使用されており、ふじみ野市を含めた埼玉でも「藍染め」が行われてきました。展示では、「藍染め」にまつわる糸や布などを染める伝統や技術などを学ぶとともに、古代ペルー、アフリカ、インドネシア、中国貴州の染織品を紹介しました。

１階の展示

主として糸を染める前にデザインを決めるイカットと呼ばれる技法や藍を用いたインドネシアの染織品や中国南部（貴州）の踹石（かかといし）を使用して光沢をつけた藍染めに刺繍をほどこした染織品を展示した。

2階の展示

藍の栽培と生産、染め方 埼玉県立歴史と民俗の博物館より借用した藍の栽培、生産と藍玉づくり、糸染めの工程など紺屋の行う貴重な写真をお借りして展示した。７月６日の「大人の藍染体験教室」で展示解説を行った。

ナイジェリアの藍染め ナイジェリアで確認できる最古の藍染め製品は、19世紀中葉のジュクン族のものとされるが、インドネシアからアラビア半島を経て18世紀にはナイジェリアに伝わっていたと考えられている。今回の展示では、イボ族の秘密結社のしきたり、ことわざ、物語、暗号などを動物や絵文字のような文様をつかって儀式などで使用した藍染めを展示した。

イボ族（ナイジェリア）結社の藍染めの展示

１階インドネシア・貴州省織物展示風景

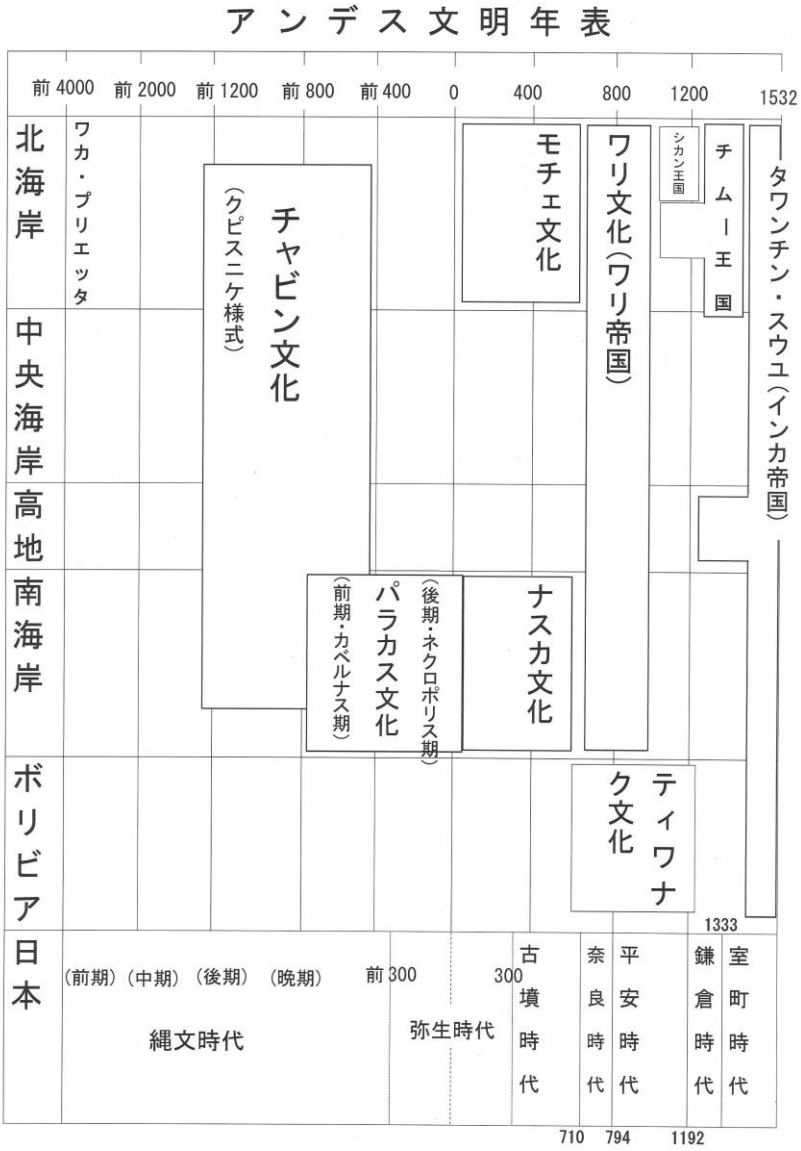
①絞（しぼ）り布（スウェラシ島、トラジャ族） 個人蔵
②ウロス（バタック族、スマトラ島北部） 個人蔵
ウロス再現品（資料館友の会による）
③プイ族の衣装（中国・貴州） 個人蔵
④ミャオ族のおぶい帯（中国・貴州） 個人蔵
⑤経絣（たてかすり）の腰巻（こしまき）(チモール島) 個人蔵
⑥イボ族（ナイジェリア）の結社の藍染め 個人蔵

古代ペルー(プレインカ)の藍染め、染織　ペルーの藍染めの歴史は古く、北海岸のワカ・プリエッタという遺跡で古いものは日本では縄文前期にあたる 6000 年以上前と考えられるインディゴで染めた布が発見されている。ペルーは、インカ帝国以前にもチャビン、パラカス、古墳時代ごろに地上絵で有名なナスカ、奈良・平安時代ごろにインカ出現以前に大帝国を築いたといわれるワリ、平安時代末から南北朝期にはペルー北海岸にチムー、中央海岸にチャンカイなどの文明がさかえ、優れた染織技術でも知られている。

ナスカ人と記念撮影しよう！

ナスカの貴族、神官階層の付けたと思われる金の頭かざりと顎飾りをつけナスカの衣装を着たマネキンと記念撮影する企画として 6 月 25 日から 7 月 9 日まで行った。

ナスカの衣装を着たマネキン



アンデス文明年表

古代ペルー(プレインカ)展示品一覧

時代、文化	材質等	点数	おおよその時期	用途、特徴等
パラカス文化(ネクロポリス期)もしくは初期ナスカ	織物	2 点	紀元前 1 世紀～紀元後 1 世紀	ターバンの一部、ポンチョかマントの一部か
ナスカ文化	織物	3 点	4～6 世紀	絞り貫頭衣 1 点、腰巻もしくは肩掛け布「舌出し神」1 点、戦勝首級の房飾り布片 1 点
	木製品	1 点		打ち込み具かオマキ(機織り用具)
ワリ文化	織物	1 点	7～10 世紀	帽子
ワルメイ川流域(ワリ期並行)	織物	1 点		

チャンカイ文化	織物	2 点	12～14 世紀	
チムー王国	織物	2 点	11～15 世紀	房付き人物文様綴れ織り 1 点、怪人像布片 1 点

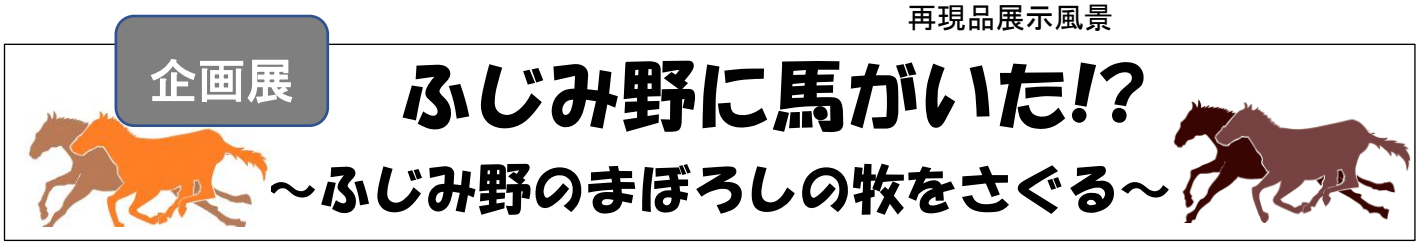
明治大正期の縞帳からの再現品、郷土の歌、ほうきの文化タペストリー

福岡と大井の郷土の歌、ほうきを中心とした特産品をぬい上げた「ほうきの文化」のタペストリー、小坂部家と谷家の縞帳(布のデザイン帳)からの再現品を展示した。

再現品一覧

再現元の縞帳	時期	点数
小坂部與助家縞帳	明治期	1 点
	大正期	1 点
小坂部家縞帳[標本]	大正 6 年	1 点
谷郷太郎家縞帳	大正期	1 点
	大正 11 年	1 点

再現品展示風景



会期;令和5年3月25日(土)～　令和5年5月28日(日)

会場;上福岡歴史民俗資料館 2 階ホール

市内の 50 年間にわたる発掘調査及び周辺市町の発掘調査成果から、古代、いわゆる律令期のふじみ野市域の様子がおぼろげながら明らかになってきました。馬の骨をはじめとし、延喜式には記録されてはいないものの、小規模な牧の存在をほのめかす文字の書かれた土器、牧に伴ってみられる製鉄遺跡や区画の溝などが発見されており、その位置づけについて令和４（2022）年に刊行された『市内遺跡 26』に田中信氏により「ふじみ野市の古代を復元する試み」という考察が発表されました。この企画展は、田中氏の考察を展示という形にしたものです。４月 23 日（日）に田中氏を講師に招いて第 1 回学習講座を行い好評でした。

牧とは？

牧とは、主として律令国家が軍事用もしくは宮廷での儀式や行幸などに用いる牛馬を育て放牧した場所のことをいう。牧が制度化されて本格的に経営が始まったのは、『続日本紀』巻第一の文武天皇 4 年 3 月(700 年)に「諸国をして牧地を定め、牛馬を放たしむ」と記述があることから 8 世紀初頭と考えられている。中国の制度にならった律令制度の中で、牧については、「厩牧令」、「厩庫律」に規定され、令制の牧として、すべて兵部省の兵馬司の指揮命令によって、諸国の国司の支配下で牧長以下の牧官（牧を管理する役人）によって経営された。大同3(808)年に、令制の牧は、兵馬司を廃止し、兵部省直属になった。兵部省が所轄する諸国牧は、『延喜式』によると 18 ヵ国に馬牧が 24 ヵ所、牛牧が 12 ヵ所、馬牛牧が 3 ヵ所の計 39 の牧が設置された。8 世紀末に勅旨牧（天皇直属の牧）は、信濃(長野県)16 ヶ所・上野(群馬県)9 ヶ所・甲斐（山梨県）3 ヶ所・武蔵（主として埼玉県と東京都）4 ヶ所（石川牧・小川牧・由比牧・立野牧）に設置され、承平年間（933 年前後）には武蔵国で 2 ヶ所（阿久原牧、小野牧）が増設されている。勅旨牧以外の牧について、『延喜式』では、武蔵国には檜前馬牧・神埼牛

牧があったとする。

武蔵国にあった六牧の場所が具体的にどこなのかは諸説あって、場所の特定は困難であるが、立野牧の候補地の一つが、さいたま市となっている。そのため、ふじみ野市及び周辺地域で発掘調査によって発見された墨書土器に書かれた「厩」や「片牧」が、立野牧を本牧とする片牧やそれに属する厩なのかまた候補地の仮説が誤っていて別の牧の片牧や厩なのか、それとも全く知られていない牧と関係があるのか悩ましいところで、今後の埼玉県内、東京都内の資料の精査と、発掘調査の成果を待ちたい。

ふじみ野市内の律令期遺跡

7世紀末から市内松山二丁目、築地地区に松山遺跡の集落が形成され、赤沼を津(渡し場、河岸場)として使い、国分寺造営に協力するとともに東久保南遺跡などの小集落を統御して牧を経営していたと推定される。同時期にハケ遺跡(福岡三丁目)と滝遺跡の集落も現れ、東台製鉄遺跡以外にも製鉄工房や牧の区画溝として亀久保堀が造られたと考えられる。9 世紀前半から中葉にかけて松山遺跡が衰退して、西沼を津として使う川崎遺跡が有力な集落として台頭してくる。

滝遺跡 21 地点 H31A 住居跡

滝遺跡 21 地点 H31A 住居跡刀子出土状態

鍛冶関連遺構及び鉄製品

ふじみ野市では、東台製鉄遺跡をはじめ、滝遺跡、松山遺跡、川崎遺跡に鍛冶工房と思われる住居跡が確認されている。このように鉄の生産がさかんなのは、馬具などの鉄製品の需要が多かったからであり、また、金属の加工のほかに皮革製品の作成にも用いられるケガキ針が西ノ原遺跡で出土している。高島英之氏は「牧には、製鉄、鍛冶工房、皮革製品工房等が附属しており、最先端技術基地であると同時に基幹物資の生産流通、各種経済活動、労働力の拠点としての側面も有していた」[1]とする。東台製鉄遺跡や滝、松山、川崎遺跡に点在する鍛冶工房、皮革工房を想起させるケガキ針を伴う住居などふじみ野市の古代の姿は、高島氏の指摘する景観を具現化しているように思われる。

松山遺跡第 49 地点 H36 号住居跡遺物出土状況

松山遺跡第 49 地点 H36 号住居跡鍛冶炉

牧関連遺物

(1)墨書土器

ハケ遺跡第 26 地点では、「馬」の墨書土器が出土し、動物遺存体の馬の骨も出土している。東久保南遺跡で「厩」と「奉」の墨書土器が共伴しており、「奉」は、小笠原牧に関連する山梨県明野村(現北杜市)梅之木遺跡からも出土例が見られ、牧に関連するものと考えられる。「奉」は、川崎遺跡にも出土例がみられる。

市域のすぐ北側にある川越市弁天西遺跡第14次調査H1号住居跡からは、「片牧家」の墨書土器が出土して

(右)「馬口」墨書土器/ハケ遺跡第 26 地点溝出土

(左)「厩」墨書土器/東久保南遺跡第 4 地点 H1号住出土

いる。「片」の意味は、入間郡の片端の意味なのか、本牧に対する片割れだから「片牧」なのかは、議論が分かれそうであるが、田中広明氏が、金木場遺跡出土の「子」の焼印や「子家」の「子」が「元（本）」家に対する「子」だとしたら「片」と「子」が似た意味合いで使われていた可能性がある

「奉」墨書土器/東久保南遺跡第 4 地点H1号住出土

「片牧家」墨書土器/川越市弁天西遺跡第14次調査H1号住出土

（2）動物遺存体

牛馬の動物依存体(骨・歯)については、出土状況から
(1)家畜として飼育していたものを土坑などに埋葬・埋納する。
(2)雨ごいなどの儀礼に伴い、牛馬を殺して、廃棄又は埋納する。
(3)皮革の原材料として加工され、不要部分が工房付近の溝や土坑に廃棄される。

ハケ遺跡第 7 地点井戸馬遺存体出土状態

などに分類されるが、多摩郡域の牧について研究している松崎元樹氏によると(1)や(2)の例は少ないという[3)]。ふじみ野市内の律令期の遺跡で発見された牛馬の動物依存体は、松山遺跡12次井戸、松山遺跡19次溝A、ハケ遺跡第7地点井戸の3例である。松山12次例は、(3)の可能性がないとはいえないものの、井戸の底部付近に多量の須恵器（墨書土器含む）とともに埋められた特殊な状況から(2)の可能性が強いと考えられる。松山19次例が(3)、ハケ第7地点例が、井戸を土坑として扱っている要素がより強いことから(3)と思われるが、井戸の廃棄儀礼と雨ごい儀礼に伴う埋納の可能性も残している。

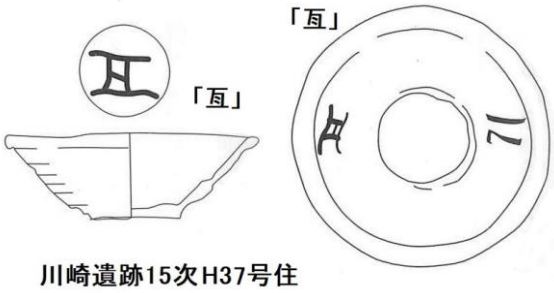
松山遺跡を構成する集団

松山遺跡は、７世紀後半から集落が営まれてきたが、８世紀から９世紀前半が頂点となる。第１２次調査で検出された井戸は、武蔵国内の井戸の配置についての研究から交通の要衝に造られたと考えられ、実際、足立郡家（さいたま市大久保領家遺跡）と入間郡家（川越市霞ヶ関遺跡）の中継点に位置している。また松山遺跡は100地点以上にわたる調査により、墨書土器に書かれた文字に一定の傾向があることがうかがわれるようになった。墨書土器の文字については、家号ではないかという説があることから、「子」を家号とする集団、もうひとつが、「井・中・万」を家号とする集団に分けられることになる。前者は、築地３丁目の２２次調査区付近の掘立柱建物跡を中心とする集団、もう一つは、松山二丁目の第１２次調査の井戸と第５５地点の掘立柱建物跡を中心とする集団と考えられ、本来は「松山遺跡」と「築地遺跡」に分けるべきなのかもしれない。

「子」の文字は、他の牧関連遺跡でもみかけるもので、山梨県南アルプス市百々遺跡のほか同県北杜市梅之木遺跡からも「子」や「奉」の墨書土器、茨城県金木場遺跡４７号住居からは「子」の字の焼印と７７号住居出土の「子家」の墨書土器が出土している。

古代船のドッグか？西沼隣接の謎の遺構と「亙」墨書土器、河川流通

川崎遺跡出土の土器には上下二本の棒に梯子状になっている記号のように見える文字があるが、これは甲斐国八田牧とされる山梨県南アルプス市百々遺跡２からも出土例が見られる。八田牧は、前御勅使川と御勅使川の間にある牧で、記号のような文字は、「亘」もしくは「亙」であって、「わたる」「わたし」と読むと推察される。「亙」は、「上下に二本の線をはさみ、こちらから向こう岸まで渡すことを示す会意文字」



川崎遺跡15次H37号住

「亙」の墨書土器/川崎遺跡 15 次調査旧 2 号（H37 号）住居出土

（『学研漢和大辞典』1990）であり、牧や河川の渡河にかかわる集団を表象する文字と考えられる。

興味深いのは、川崎遺跡は西沼に隣接する集落であり、長い間謎とされてきた昭和50年実施の大字川崎字宮後168-3調査区の大きなくぼみ状の遺構は、西沼に隣接した曳舟の水路ではないかと推察される。同調査区では、瓦の破片が集中的に発見され、その100m東には、１次、２次、９次、３２地点H６５号住居など瓦が出土する場所がある。川崎遺跡が入間郡家（現川越市霞ヶ関）から足立郡家（現さいたま市桜区大久保領家）の渡河点の施設であることを示すものであり、中継点としての役割を松山遺跡から引き継いだのかもしれない。

［註］

1）高島英之 1996「牧と古代の土地開発」『帝京大学山梨文化財研究所報告』7

2）田中広明 2008「牧の管理と地域開発」『牧の考古学』高志書院

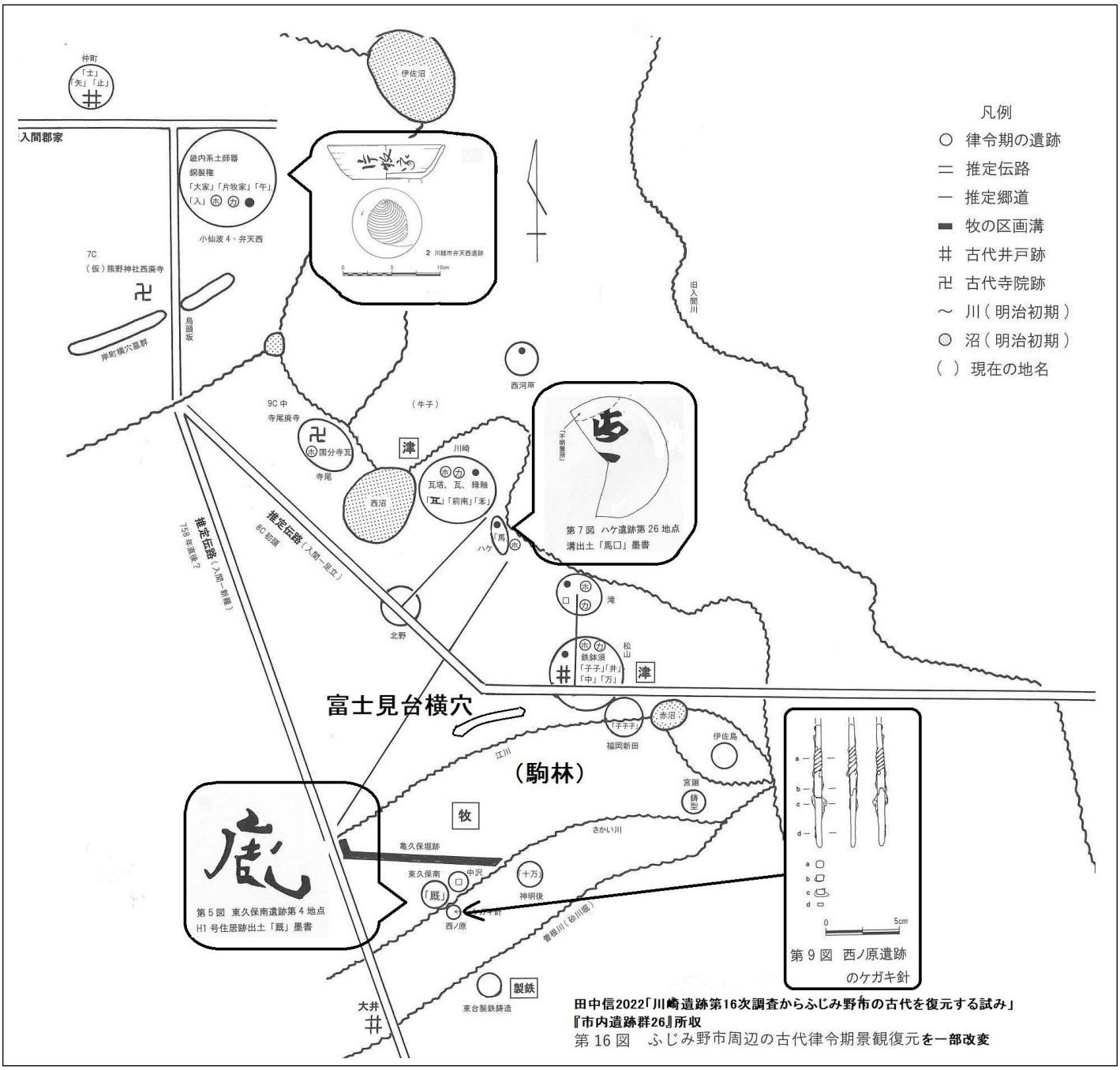
3）松崎元樹 2008「武蔵国多摩郡域の牧をさぐる」『牧の考古学』高志書院

川崎遺跡の曳舟の水路状遺構（上；西より、下；東より。道路及びその向こう側が西沼にあたる。）

ふじみ野市周辺の古代（律令期）像の復元(試論)

時期	国及び関東地方の動き	武蔵国内、入間郡周辺の動き	ふじみ野市及びその周辺の動き
7 世紀後半	東山道武蔵路の敷設		松山遺跡、滝遺跡の集落の形成
8 世紀前半			福岡江川とさかい川にはさまれた牧の現地経営と入間郡家と足立郡家をつなぐ道路の中継点や水運による渡し場としての機能を担わせるため、滝遺跡、松山遺跡に官衙的な性格をもつ集落が形成される。
8世紀中葉～9 世紀初頭	天平13（741）年、聖武天皇による国分寺、国分尼寺造営の詔 天平 19(747）年に郡司主体に切り替える。	○ 天 平 宝字 2（758）、入間郡の南側に新羅郡が設置される。→入間郡と新羅郡を結ぶ道路の敷設 ○比企郡の境にある南比企窯跡群(現鳩山町)と高麗郡との境にある東金子窯跡群(現入間市)で創建瓦が生産され、供給された。	○新羅郡との境に築かれた製鉄・鋳造工房（東台製鉄遺跡）で、国分寺の建設、造営に必要な鉄製品、おそらくくぎなどの建材や仏具などの材料を生産・供給。 ○瓦や鉄製品、建築部材を久下戸付近にあったと推察される郡津（郡の河岸場）を中継基地として水上輸送。 ○松山遺跡をはじめとした新河岸川沿いの集落は、その郡津の仕事に協力。 ○国分寺造営、道路敷設、水運の運営等のために多くの人員が動員→相模型坏や甲斐型坏をたずさえた人々が新河岸川沿いの集落に移住。

9 世紀前半以降			○松山遺跡の衰退と川崎遺跡の発展。牧や道路中継点、津(河岸場)の機能を引き継ぐ。
9 世紀中葉	承知 12(845)年、国分寺七重塔の再建	七重塔再建瓦が東金子窯跡群の八坂前窯で焼成。	○八坂前産の瓦が、川崎遺跡の対岸の寺尾廃寺で使用される。国分寺までの瓦の水上輸送に西沼が使われ、その輸送に寺尾地区周辺の集団と川崎遺跡の人々が協力。



ふじみ野市周辺の古代律令期景観復元試案（田中信 2022 を一部加筆改変）

※なお、本記事は、田中信氏(元川越市立博物館長、現日本女子大非常勤講師)の研究成果を参照して作成しています。ここに深く感謝の意を表します。